田漢の京劇『白蛇伝』の改作について

坂田愛美

第一章　導入

第一節　田漢による京劇『白蛇伝』三作品の紹介

白蛇伝物語（白蛇の精が人間の女性に姿を変え、人間の男性である許仙（許宣）に恋をする物語）は、中国で古くから親しまれ、様々な地方劇で演じられてきた。[1] とりわけ京劇においては、文・武（唱・立ち回り）を兼ね備えた人気演目として上演され続けているが、現在演じられている京劇『白蛇伝』は、劇作家の田漢（一八九八～一九六八）による脚本が基本となっている。

田漢の脚色した京劇『白蛇伝』といえば、一九五五年に書かれた『白蛇伝』が最もよく知られ、現在上演されているものはこれを基にしている。しかし実際は、一九四三年に書かれた『金鉢記』、一九五二年に書かれた『白蛇伝』と合わせて、三つの脚本が存在する。

本論は、これら三脚本の改作にいかなる意味があったのかを検討するものである。

論文や事典類の多くは、田漢が『金鉢記』を修正し『白蛇伝』としたことは説明しているものの、『白蛇伝』に二脚

本があることには言及しておらず、一九五二年の『白蛇伝』には触れていないことが多い。これら三脚本を詳細に比較検討した研究はこれまでなされておらず、また、田漢は当時戯曲改革事業に盛んに取り組んでおり、その中心的役割を果たしていたにもかかわらず、この視点から『白蛇伝』の改作にアプローチした論文もほとんど見当たらない。本研究は、このような先行研究への疑問に端を発している。

本節ではまず、三脚本の成立・上演過程を見ていくことにしたい。(2)

(一) 一九四三年『金鉢記』

一九四三年、田漢は、四維平劇社の李紫貴、金素秋の要請を受け、彼らの整理していた『白蛇伝』を基礎に『金鉢記』を改編創作した。(3) 四維平劇社による『白蛇伝』の上演はあまり成功していなかったため、田漢に脚本の改良を依頼したのだ。田漢は、弾詞の『義妖伝』を参照してその脚本を修正し、一週間足らずで『金鉢記』を書きあげた。(4)

『金鉢記』は同年九月九日に上演予定であり、稽古をつけ広告も出していたが、上演当日になって禁演となった。表向きには反仏教の疑いがあるためという理由からだったが、国民党統治の悪の現実をほのめかしている、とされたのが内実であった。

翌年、桂林で上演された。脚本自体は田漢の『金鉢記』であったが、その時だけ『白蛇伝』と名前を変え、田漢主編とも打ち出さない二日間だけの上演であった。

一九四七年、李紫貴は田漢の依頼をうけ、四維平劇社内の戯劇教育学校である四維児童戯劇学校で『金鉢記』の稽古をつけ、翌一九四八年に上演された。昼は『金鉢記』あるいは『武則天』、夜は『琵琶行』を上演するという形式であった。(5)

一九五〇年の全国戯曲工作会議で、四維児童戯劇学校が発展してできた国立の戯劇学校である中国戯曲研究院戯曲実

験学校が『金鉢記』を上演した。この時には、抗日的な内容の部分は削除していた。

（二）一九五二年『白蛇伝』

『金鉢記』に対してはいくつか意見が寄せられているが、中でも田漢の『金鉢記』改作に大きな影響を与えたとされるのが、一九五二年九月一二日号『人民日報』掲載の戴不凡「評『金鉢記』」である。戴不凡は『金鉢記』を、白蛇故事の反封建主題を歪曲しており、反歴史主義の傾向にあるばかりか封建統治階級を宣揚さえしているとして、批判した。[6] 田漢は、寄せられた意見を汲み取り、脚本を修正して一九五二年に『白蛇伝』を書き上げた。[7]

この『白蛇伝』は、一九五二年一〇月六日から一一月一四日に北京で開かれた第一届全国戯曲観摩演出大会において、中国戯曲研究院戯曲実験学校によって上演された。『白蛇伝』はここで、王瑶卿の栄誉賞や、白素貞役の劉秀栄の演員賞二等賞を始めとして数々の賞を受賞した。[8]

戴不凡の批判と大会の開催時期とを考えると、『白蛇伝』は完成後すぐ上演されたことになる。当然、上演するには稽古が必要であるから、田漢の改作は稽古現場で稽古と同時に進んでいたものと思われ、脚色、演出に大きな役割を果たした李紫貴や唱腔の設計に大いに貢献した王瑶卿らとの共同の作業であったことが推察される。

（三）一九五五年『白蛇伝』

一九五四年春に峨眉山に登ったことが、田漢の更なる改作に大きな影響を与えた。田漢は、この年中国京劇団を率いて人民解放軍を慰問した帰りに峨眉山に登ったのだが、その時見た峨眉山の様子が今回の改作に影響を与えた。[9] 田漢にとって、体験することの必要性を感じた出来事であった。

一九五四年、呂君樵、鄭亦秋の監督、葉盛蘭、杜近芳の主演で中国京劇院により上演された。

これ以降は大きな修正も無く、この脚本が定本となり、全国に広まり上演されるようになった。

田漢は、一九六三年にも、一度この『白蛇伝』に唱を書き足したことがある。[10] その年の秋、北京京劇団が田漢の『白蛇伝』を上演することになったのだが、監督であった張艾丁は、「合鉢」の場面の白素貞と子供の離別の唱を大段の唱にして、彼女の悲痛と怒りの複雑な心情をうたい上げるべきだ、と提案した。田漢は了承し、一晩で書き上げた。これにより、元々四句しかなかった母子の離別の唱は二十九句にまで増えた。

ただし、これはこの度の上演のための処置である。実際の上演に際しては、上演時間の制限などによって、状況に合わせた内容の削減や演出方法の変更もあるはずである。脚本が、全ての上演において完全な形で演じられるとは限らないことも忘れてはならない。

本論で取り上げるのは、脚本として発表、出版された三つのものである。便宜上、以下では、一九五二年の『白蛇伝』を『白蛇伝』1、一九五五年の『白蛇伝』を『白蛇伝』2と称することとする。

第二節　田漢と戯曲改革

田漢は生涯劇作活動に取り組んでいるが、三脚本は中でも戯曲改革に従事していた時期に書かれた。戯曲改革とその時の田漢について知ることで、それと同時進行していた『白蛇伝』改作を検討する大きな助けになることは間違いない。[11]

（一）一九四三年『金鉢記』の時期

抗日戦争期、中国共産党は文化政策を強化した。戯曲を抗日戦争に奉仕させることが課題となり、役者たちは、戦線

の慰問や慈善公演など様々な形で抗日闘争を進め、愛国行動を示した。この時期の戯曲活動の特徴は、戯曲の内容や役者たちの行動により、戯曲と現実の闘争を結びつけることであったと言える。

一九三七年、中国共産党は、抗戦戯劇を率いる組織として上海戯劇会救亡協会歌劇部を組織した。これは、味方の陣地や傷兵病院に赴き抗日戦士を鼓舞、慰問したり、民族意識を強調し愛国思想を宣伝する抗日的内容の劇本を書いたりするための組織であった。

抗日戦争初期の戯曲は、伝統的な古い形式に不自然に抗日救亡の内容を組み入れていたが、この方法はすぐに是正されるべきと認識されるようになった。一九四二年、毛沢東は、伝統戯曲と新たな時代の内容をいかに結びつけるかという問題を解決するために、「推陳出新（古いものの中から新しいものを出す）」の方針を打ち出した。この言葉は以後の戯曲改革のキーワードとなる。この方針の下で多くの編劇がなされ、抗日根拠地での戯曲活動は飛躍的に発展した。

田漢は、積極的に抗戦戯劇活動に取り組んでいた一人である。

一九三五年、国民党により共産分子として逮捕され、半年後に出獄した後南京に軟禁されていた田漢は、その軟禁をやぶり上海へ戻ると、一九三七年には欧陽予倩らとともに前述の上海戯劇会救亡協会を設立し、抗戦戯劇活動に従事した。国民政府軍事委員会政治部第三庁第六処（芸術処）処長となり、映画や戯劇、美術などの宣伝工作を主宰するほか、各地の抗戦戯劇を指導するなどして芸術宣伝の分野を管掌した。その後は、桂林や重慶を転々としながら活動を続けていた。その間、四維平劇社児童訓練班（四維児童戯劇学校の前身）を指導し、演劇の指導や愛国主義の啓蒙教育を行ったりしていた。

こうした中、一九四三年に『金鉢記』は書かれた。当時は、国民党側共産党側を問わず、抗日意識を鼓舞する京劇脚本が書かれていた。田漢が『金鉢記』を書いたのは国統区である桂林であったが、自身は共産党側の人間であったため、

その内容は抗日意識を鼓舞する体裁をとりつつ国民党を批判するものとなっており、複雑な背景を持っている。[12]

（二）一九五二年『白蛇伝』から一九五五年『白蛇伝』の時期

建国後から一九五五年頃までは、戯曲改革が非常に盛んであった時期である。『白蛇伝』1と『白蛇伝』2の時期の戯曲改革に区切りを入れることは難しいため、ここでは、建国から一九五五年までの戯曲改革と田漢の活動について述べる。

中国共産党は一九四八年一一月、華北戯劇音楽工作委員会を成立させ、当時上演されていた劇を「有利」「無害」「有害」の三種に分ける基準を設定した。[13]この委員会による活動が、毛沢東の「推陳出新」方針下における戯曲改革の第一歩だったといってよい。

戯曲改革の目的は、戯曲を改造して中国共産党の宣伝道具とするためであった。旧戯劇は過去の人民の生活を反映しているものであり、新しい人民の生活を反映させて中国共産党の政権を守るために奉仕させるには新たな戯曲が必要である、との考えに始まっていた。最終的な目的は、人民の新たな生活を表現する新たな戯曲を打ち立てることにあったのだ。

建国後、戯曲改革の専門機関が次々と成立する。その先頭を切ったのが、全国の戯曲改革工作を率いる組織として一九四九年一〇月に中国共産党文化部内に成立した戯曲改進局である。田漢は局長を務めていた。主要任務は「民族の戯曲の遺産を発掘・整理し、批判と揚棄を経て推陳出新させ、新たな歴史歌劇と時事歌劇などの戯曲を生み出し、人民に奉仕する斬新な戯曲とする」ことであった。[14]他には、戯曲改進委員会、戯曲改進局所属の戯曲実験学校、京劇研究院などが成立し、足場は着々と固められていった。

一九五〇年一一月、北京で全国戯曲工作会議が開かれた。各地の戯曲改革工作の状況報告や討論、各地の代表による慈善公演が行われ、戯曲実験学校により『金鉢記』も上演された。副主席であった田漢は「為愛国主義的人民新戯曲而奮闘」と題する報告で、戯曲内容の審査や修正の問題などについて詳しく報告した。この報告はその後の戯曲改革の方針となる。

一九五一年三月、毛沢東により「百花斉放、推陳出新」の方針が提唱された。これは以前出された「推陳出新」方針をさらに一歩進めたもので、この先の戯曲改革の大きなテーマとなる。「推陳出新」の意味は旧戯曲を廃し新戯曲を打ち立てること、「百花斉放」の意味はあらゆる戯曲劇種を一斉に上演することである。表面的な禁演は根本的解決にはならず、新しい戯曲もすぐにはできないため、旧戯曲を審査修正して上演していこうという意図であった。

一九五一年五月五日、先の田漢報告を受け「関于戯曲改革工作的指示」（「五五指示」とも呼ばれる）が発せられた。これは「百花斉放、推陳出新」の方針を具体化したもので、侵略に反抗し人民の正義を発揚するような戯曲を推進し、封建奴隷道徳を鼓吹するような戯曲には反対する、とした上で「改戯、改人、改制」の「三改」を定めた。「改戯」とは、劇本や舞台から古い有害な要素を排除すること、「改人」とは、役者の思想を改造し政治的覚悟と文化的業務の水準を高めること、「改制」とは、古い戯班内の不合理な制度を改革することである。これに基づき各地で戯曲改革が進められた。

一九五二年一〇月六日から一一月四日まで、戯曲改革の節目ともいえる第一届全国戯曲観摩演出大会が開かれた。この大会の主な任務は「各劇種の戯曲改革工作者が、相互に見習い学習し、経験を吸収し、戯曲の思想と芸術水準を高め、『百花斉放、推陳出新』の方針を徹底すること」であった。前述の通りここで田漢の『白蛇伝』は上演された。参加した優秀な劇目は大会後全国へ広まり、各地でその経験が交流され、戯曲改革の成功が目指された。

このような戯曲改革の流れの中で、『白蛇伝』改作も行われたのである。

この時期の田漢は、文化部戯曲改進局局長、戯曲実験学校校長、全国戯曲工作会議副主席など、その他多くの肩書きを持っていた。田漢が当時の戯曲改革の中心的役割を担っていたことが分かるだろう。

（三）戯曲の内容に加えられた制限と『白蛇伝』

戯曲改革は、戯曲の内容をどのように方向付け、いかなる制限を加えたのだろうか。

一九四八年の「有利」「無害」「有害」の基準を皮切りに、戯曲内容の審査が本格化し、具体的に劇目も指定されたようだ。

続く全国戯曲工作会議では、野蛮でおくれた、奴隷的、恐怖的なイメージは舞台上から排除するべきだ、とされた。例えば、纏足や残酷な刑などは、自己の民族を侮辱し愛国主義に反するため排除すべきとされた。伝統的な戯曲については、神話と迷信、恋愛と淫蕩は慎重に区別しなければならない（神話、恋愛は良いが、迷信、淫蕩は良くない）とし、神話劇については、『西遊記』や『白蛇伝』などの優秀な劇目は、豊かな想像力と美しいイメージによって人間の闘争を表現しているから保護するべきだ、とされた。

続く「五五指示」では、「改戯」の部分が戯曲の内容に関係する。内容上は、迷信、色情の曲詞や筋立ては排除すべきであり、形式上は、旦の「蹺工」（纏足の婦人に扮するのに木製の高い靴底を足につけて行う演技）などのおくれた、低俗で、醜悪な演出は、徐々に排除して舞台上を浄化すべきとされた。

このように、内容が不適当とされるものは禁演の措置がとられたり、適当な内容に改編されたりした。多くの劇目が禁止された中、『白蛇伝』は田漢の手により改編され、上演が続けられた。つまり、『白蛇伝』は戯曲改革の意図に合っていたということだ。この事業を経て上演され続けた『白蛇伝』1、2は、中国共産党の宣伝機能を持つものであったのだ。

一九五〇年二月の中ソ友好同盟相互援助条約の締結、同年六月の朝鮮戦争の勃発など当時の多端な国内外情勢の中で、恋愛を主軸とする『白蛇伝』に最も深く関わるのが、一九五〇年五月一日に公布施行された中華人民共和国婚姻法であった。[15] 原則、結婚、夫婦間の権利と義務、父母子女間の関係、離婚、離婚後の子女の扶養と教育、離婚後の財産と生活、附則の八章、全二十七条から成る。原則の第一条では、封建主義的な婚姻制度を排除し、男女の婚姻の自由、一夫一妻、男女の権利平等を守る新たな民主主義的な婚姻制度を実行する、と本法律の目的を定めている。[16] 続く原則の第二条では、寡婦の婚姻の自由への干渉を禁止することを定めている。

『白蛇伝』以外にも、婚姻法を宣伝する劇目は多くあった。『秦香蓮』や『梁山伯与祝英台』などである。[17] 婚姻法を宣伝するものは、男女が愛情のために奮闘する筋立てで教条主義的な要素があまり強くなく、観客をひきつけやすいものであったため多く演じられた。また、『白蛇伝』は伝統劇目を改編したものであったから、一過性のものにならずに上演され続けたのであろう。

第二章　三脚本の比較検討

第二章では、三脚本を比較し、注目すべき相違点についての分析を行い、改作意図の検討を試みる。

第一節　場面構成

脚本間に見られる大きな違いは、場面（「場」）構成である。場面数は、『金鉢記』は全二十六場、『白蛇伝』1は全二十四場、『白蛇伝』2は全十六場であり、全体として減少しているが、内容を見ると、後で削除されているだけではなく、追加されている場面もある。また、内容が同じでも場面の名前が異なったり、名前が同じかあるいは似ていても内容が異なったりする場合もある。

以下に対応表を示す。

『金鉢記』	①別師	×	②雨帰	③借傘	④結禍	⑤盗銀	⑥婚別	⑦見姉	⑧被捕	⑨長亭	⑩郊遇	×	⑪療疫	⑫酒変	×	⑬盗草	⑭煎薬	⑮渡語	⑯聴潮	⑰飛槳	⑱水闘	⑲風送	⑳断橋	㉑産子	㉒海迫	㉓仙驚	㉔接鉢	㉕別子	㉖倒塔
『白蛇伝』1	①下山	②	②掃墓	③遊湖	④結親	⑤盗庫	×	⑥銀禍	×	×	⑦發配	⑧査白	⑨説許	⑩酒変	⑪守山	⑫盗草	⑬煎薬	⑭上山	⑮渡江	⑯索夫	⑰水闘	⑱逃山	⑲断橋	⑳海迫	㉑敗青	㉒合鉢	㉓哭塔	㉔倒塔
『白蛇伝』2	×	×	①遊湖	②	②結親	×	×	③査白	④説許	⑤酒変	⑥守山	⑦盗草	⑧釋疑	⑨上山	⑩渡江	⑪索夫	⑫水闘	⑬逃山	⑭断橋	⑮合鉢	×	⑯倒塔						

* * *

場面数の大幅な減少が意味するものは、第一に上演時間の短縮である。張艾丁「懐念田漢同志」によれば、『白蛇伝』2は全て上演すると三時間以上かかる脚本であった。これより場面数の多い前二脚本は、四、五時間はかかったであろう。第二に、物語の簡略化が挙げられる。これにより、観客は劇の展開に乗り遅れずについていける。後の脚本になる

と、さほど重要でない場面は削除され、今日でも折子戯（物語全体のある部分を抜き出して演ずる演目）としてもよく演じられる「水鬪」や「断橋」などの見せ場がより詳しく書かれている。[18] 一つの脚本としてのまとまりが感じられるようになっており、観客を飽きさせない、劇としてのエンタテイメント性が増す結果となったといえよう。

第二節　内容

以下何点かに分けて、まずあらすじを示した上で、その内容の違いについて検討する。

（一）盗庫

場面は、白素貞と許仙が小青の仲立ちで結婚をした後から始まる。[19]

『金鉢記』第五場「盗銀」から第十場「郊遇」

白素貞は小青に、許仙は貧しいので銭塘知県のところからお金を借りてくるよう指示する。それは、倭寇と通じた汪大王から倭兵の攻撃に内応するよう依頼されて送られた銀五百両である。事成れば更に五百両という条件の前に、どうすべきか知県が迷っていると、突然小青が現れ一瞬の暗闇で銀を盗み出す。許仙は、白素貞がくれた銀五百両と絹織物を携え喜んで帰宅し、姉の陳許氏に結婚の報告をする。そこに姉の夫で役人の陳彪が青ざめて帰ってきた。忽然と消えた銀を三日以内に探すよう命じられていたのだ。陳彪は、許仙が白素貞から銀をもらったと聞きもしやと思い、見てみると果たしてそれは盗まれた庫銀であった。陳彪は許仙を捕らえ取り調べるが、白素貞にその銀の正体を暴かれそうになったため、白素貞の罪は不問に付し、許仙は鎮江へ流罪とした。許仙が鎮江へ行きしばらくすると白素貞と小青がやってきて彼らは再会し、その地で薬屋を営むこととなる。

『白蛇伝』1第五場「盗庫」から第七場「發配」

白素貞は小青に、許仙は貧しいので銭塘県からお金を借りてくるよう指示する。役所では夜警が巡回中、小青が壁に穴をあけて侵入し庫銀を盗んで消える。許仙は白素貞から贈られた絹織物と銀五封を携え帰宅し、姉の陳許氏に結婚の報告をする。陳許氏が喜んでいると、役人である姉の夫の陳彪が困り果てた様子で帰ってきた。忽然と消えた銀を三日以内に探すよう命じられていたのだ。許仙が持ち帰った銀を見てみると、それは盗まれた庫銀であった。ただならぬ雰囲気の中、陳許氏はなんとか許仙を助けるよう夫に懇願する。場面は、許仙が役人に護送されている場面にうつる。犯人はその後姿をくらました白素貞とされ、許仙は鎮江へ流罪となった。妻の仕業なはずがないと訝りながらも、許仙は役人に叩かれ進んで行く。そこへ白素貞と小青が登場。白素貞は、この銀は亡き父が銭塘を守って海賊と戦った時にもらった俸銀でありそれが銭塘の庫銀だったのだ、と嘘の説明をし、役人に許仙の刑具を外させる。白素貞は、鎮江で薬屋を営もうと提案する。

＊　＊　＊

「盗庫」のくだりは、『金鉢記』、『白蛇伝』1には存在するが、『白蛇伝』2には存在しない。場面数が次第に減少し、最後には完全に削除されているのは何故だろうか。

『金鉢記』から『白蛇伝』1にかけて削られた場面は、小青が盗みから戻って白素貞が許仙に銀と絹を贈り、許仙が帰宅する場面、許仙が捕らえられ取調べを受け、流罪の判決を受ける場面、許仙が流される前の白素貞と許仙らの別れの場面、の三つである。

『金鉢記』では、抗戦戯劇の性格が色濃く出ている。白蛇故事と合わない不自然な時代背景は批判の対象となっている。[20] こうした批判があったことや、抗日戦争が終わり時代の要請が変わったことなどによりこの筋が削除されたことは、

当然の動きであると言えよう。

盗みは野蛮で、悪い行為だと言える。戯曲改革の指示通りなら排除されるべき内容だ。しかし『白蛇伝』1で削られたのは上述の三場面のみで、「盗庫」の核にあたる盗みの部分は保たれたままである。削られた三場面は、このくだりにとってさほど重要な場面ではない。物語をより単純化し分かりやすくするために、些末な部分が削られたのだと考えられる。一見野蛮で悪い要素である「盗庫」が、一九五二年の第一届全国戯曲観摩演出大会での上演の時点で削除されていないのは、『白蛇伝』は神話劇として優秀な劇目であると認められていたからであろう（一九五〇年全国戯曲工作会議）。またこれは、白蛇故事にもとからある伝統的な内容でもある。そのため、この部分には手は加えられなかったと考えられる。

ここで、白素貞の性格に注目する。白素貞は、小青に指示をする時、「借りてきなさい」と言っており、決して「盗んで来なさい」とは言っていない。[21] しかし実際、小青は銀を盗み出しており、白素貞にもそれを返すつもりはないようだ。その上、これが原因で許仙は災難を被っている。盗みの実行犯である小青だけでなく、指示役の白素貞も悪い要素に分類されてしまう。『白蛇伝』1でも、盗み自体が悪いことには変わりはなく、白素貞からはまさしく妖怪的な悪さや恐ろしさが抜け切らない。

『白蛇伝』2ではこの内容は完全に削除され、白素貞から悪い要素が消え、許仙にも災難は及ばなくなった。白素貞の愛すべきイメージが強められ、その美しい性格に一貫性が生まれたことで、より観客は彼女へ同情を抱くようになる。

『白蛇伝』1では、故事に由来する伝統的な筋が残され、神話劇としての性格は保たれたが、白素貞の性格を見るに、かえって中途半端な処理となってしまった。『白蛇伝』2でこの筋を完全に削除したことは、白素貞の性格に一貫性を持たせる、意味のある処理の仕方であった。

（二）酒変

この場面は、登場人物の感情描写が非常に豊かな場面である。時は端午の節句。二人が鎮江で営む保和堂という薬店にて、許仙が白素貞に雄黄酒を飲ませようとするところから始まる。

『金鉢記』第十二場「酒変」

すでに二人は酒を交わしている。許仙は酒をさらに白素貞に勧めるが、彼女は「体調が悪い」と断り、小青も「妊娠中なのだから」などと盛んに制止する。許仙が跪いてまで頼むので、白素貞は飲むことにするが、酔って吐いてしまい、許仙は慌てて醒酒湯を取りにゆく。ここに突然金山寺の和尚法海が現れ、白素貞はその姿を見て倒れてしまう。醒酒湯を持って許仙が戻ると、法海は許仙に「この帳の中にあるものがまさしくお前の醒酒湯だ。醒酒湯を飲めばお前の夢も覚める。金山寺でお前を待っているぞ。」と言い残し去ってゆく。そこで許仙は以前法海に、白素貞は千年の白蛇の化身であり端午の節句に雄黄酒を飲ませれば正体を現す、と言われた（『金鉢記』第十一場「療疫」）ことを思い出した。許仙は、本当だろうかと疑いつつも彼女を介抱しようと帳に近づくが、平素から蛇は嫌いであるし、酔いが覚めてから酒を飲ませたことを詫びても遅くはないと考えてその場を去ろうとする。するとそこに法海の声。「見れば目覚める。目覚めれば救われるのだ。」とうとう許仙は帳を開け、蛇の姿になった妻を目撃してしまい、驚倒する。

『白蛇伝』1第十場「酒変」

許仙は、一緒に酒を飲むよう白素貞に頼む。彼女は「体調が悪い」と断り、小青も「妊娠中なのだから」と止める。許仙は「今日という佳節は私の顔に免じて飲んでほしい」と頼むがやはり断られる。（※）許仙が跪いてまで頼むので、白素貞は「本当は飲むべきではないが、夫婦の愛情に傷がつくのは恐い。」と言って飲んだところ、酔って吐いてしまい、許仙は慌てて醒酒湯を取りに行く。そこで許仙は突然、白素貞は千年の蛇の化身で端午に雄黄酒を飲ませると元の

姿を現す、と以前法海に言われた（『白蛇伝』1第九場「説許」）ことを思い出した。許仙は全く信じていないが、彼女は熟睡しているようだし、酔いが覚めてから無理に飲ませたことを詫びても遅くはないと思いその場を去ろうとする。すると法海の声が聞こえる。「帳の中にあるものがまさしくお前の醒酒湯だ。」許仙は帳を開け蛇の姿となった妻を目撃してしまい、驚倒する。後に小青が倒れている許仙を発見し白素貞を目覚めさせると、悲しみに沈む白素貞に小青は、許仙を救うために仙山から霊芝を取ってきてはどうかと提案する。白素貞は、許仙を小青に託し一人霊芝を取りに行く。

『白蛇伝』2第五場「酒変」

始めは、『白蛇伝』1の（※）までと同じである。許仙は、以前法海に「白素貞は千年の蛇の化身で雄黄酒を飲むと元の姿を現す」と言われた（『白蛇伝』2第四場「説許」）ことを妻に打ち明ける。彼女は「私を試そうとしたのね」と言って怒るが、許仙は「信じていないからこそ打ち明けたのだ。」「妖怪であろうとなかろうと、愛している。」と言う。白素貞は、「少しの疑念は邪念となり、夫婦の愛が長続きするのは難しくなる。」と考えて酒を飲むが、酔って吐いてしまい、許仙は醒酒湯を取りに行く。そこで許仙は再び法海の言葉を思い出す。全く信じてはいないが、熟睡しているようだし酔いが覚めてから飲ませたことを詫びても遅くはない、と思いその場を去ろうとする。すると法海の声が聞こえてきて、ついに許仙は帳の中で蛇の姿を現している妻を目撃してしまい、驚倒する。倒れている許仙を見つけた小青が白素貞を目覚めさせる。悲しみに沈む白素貞に小青が「今は悲しむ時ではありません。」と言うと、白素貞は自ら、「仙山に行って霊芝を取ってきます。」と言い、許仙を小青に託して一人霊芝を取りに行く。

＊　＊　＊

まず、許仙が白素貞に雄黄酒を飲むよう頼む場面に注目する。

『金鉢記』では、小青による抑制が強く、白素貞と許仙の間にそれほど駆け引きはない。『白蛇伝』1では、小青の抑制も強いが白素貞も自分の言葉でしっかり断っている。結局飲むことになるのは、彼女が夫婦間の愛情を大事に思うが故である。『白蛇伝』2では、非常に夫婦らしいやりとりが展開されていて、夫婦間の深い愛情と絆への思い入れの強さを感情豊かに表現することに成功している。

次に、白素貞が酔って吐いた後に許仙が帳の中を見るべきか否か悩んでいる場面に注目し、許仙の白素貞に対する愛の深さについて考える。『金鉢記』では、許仙は法海の発言にある程度疑いを持っており、妻は本当に蛇なのかもしれない、とその疑いを断ち切れないでいる。[22] しかし妻を愛する気持ちも強く、無理に酒を飲ませた責任を感じてもいて、許仙の心は非常に大きく揺れている。『白蛇伝』1、2では、許仙は法海の忠告を全く信じておらず、妻への愛情の深さ、一途さが見て取れる。その後に続く歌にも、こうした許仙の感情は比較できる。

『金鉢記』　老法海幾次對我道，道我妻是千年的蛇妖。
本當要把眞象曉，猶恐他眞是浪裏蛟。
本當不把她的香夢擾，這疑心一點怎能消？
拚着生死把賢妻叫，……

『白蛇伝』1　老法海幾次對我言道，道我妻乃是千年的蛇妖。
我本當不把香夢擾，這疑心一點怎能消？
端起湯兒把賢妻叫，……

『白蛇伝』2　老法海幾次對我言道，道我妻乃是千年的蛇妖。
本當不把香夢擾，這疑心一點怎能消？
端起湯兒把賢妻叫，……

意味が大きく違うのは最後の句である。『白蛇伝』1、2では「湯（醒酒湯）を持ち妻を呼ぼう」と穏やかに言うのに対し、『金鉢記』では「生死を顧みず妻を呼ぼう」と言って帳を開ける。『金鉢記』では、いかに許仙が“白素貞、蛇疑惑”に恐れをなしているかが分かる。

また、白素貞の許仙への愛情の深さを裏付ける場面として、白素貞と小青が仙山に霊芝を取りに行こうと相談する場面に注目したい。『金鉢記』にはこのくだりはない。『白蛇伝』1では、小青が、白素貞に霊芝を取りに行くように勧めるが、『白蛇伝』2では、白素貞自らが、霊芝を取りに行くことを提案している。このように、白素貞の自主性は次第に強まっており、夫への愛情の深さが増していく様子が感じられる。

以上のように、「酒変」の場面の変遷からは夫婦間の愛情が強まっていく過程を見ることができる。また、感情描写がより人間味に溢れ豊かになったことで、人物の性格に一貫性が生まれた。特に白素貞は、（一）で論じた「盗庫」の場面の変遷と合わせて、愛すべきイメージが強められた。このような人物描写や物語展開の処理によって、観客はより人物に惹きつけられ、劇に引き込まれる。この場面の改作からは、一つの演劇作品として完成度の高まっていく過程が見て取れるように思う。

（三）煎薬

白素貞が仙山から霊芝を取って戻ったところから始まる。

『金鉢記』第十四場「煎薬」

ますます脈拍が弱くなっている許仙の元に白素貞が戻ると、小青はこう忠告する。早いうちに身を引き再び恋に迷ってはならない、産んだ子供は許仙に渡せば報恩の意図は全うできる、近頃許仙は法海和尚と近づいているから今離れるのが賢明である、と。[23] 白素貞は、仙山で南極仙翁にも同じ忠告をされていた。[24] さらに小青は、千年の修行

を無駄にしていいのか、異類間に愛情はありえない、と続ける。しかし白素貞は全く聞く耳を持たず、許仙に薬を飲ませに行く。

『白蛇伝』1第十三場「煎薬」

許仙は息も絶え絶えな状態である。戻った白素貞に小青は、許仙は近頃法海和尚と近づいているようだから、金山寺へ行き法海を殺して今後の患いを除くべきである、と忠告する。白素貞が、確かに法海は悪いが慌ててやるべきことではない、と言うと、小青は、殺さないのなら法海が私たちを放っておくわけがないから、許仙が元気になったら早いうちに身を引くべきだ、と言う。白素貞は小青の言葉を聞き入れず、許仙に薬を飲ませに行く。

『白蛇伝』2第八場「釋疑」

白素貞が戻り許仙に薬を飲ませ生き返らせた後から始まる。許仙の態度は非常に冷淡で、店の決算業務を忙しくしているが、小青が見るとそれは何ヶ月も前の帳簿を引っ張り出しているのだった。白素貞は「ようやく命を救ったのに」と嘆き、小青は、許仙に義理も人情もないことを嘆き、やはり許仙を捨てて身を引き遠く離れて、苦境に陥るのを避けるべきだ、と忠告する。全く聞き入れない白素貞に小青は、気性のはっきりしない許仙には別れを告げるべき、と言う。それでも白素貞は聞く耳を持たないので、小青は、許仙の疑念を除く方法を考えるべきだ、と忠告する。白素貞は、白絹を銀の蛇に見立てて梁の上に出現させ、家を守るという「倉龍」が現れたと言って皆で見れば、疑心は消えるだろう、と提案する。その作戦は効を奏し、二人は仲直りして再び愛し合うようになる。

＊　＊　＊

ここでは、小青の進言内容とその理由に注目し、小青の性格について考える。

『金鉢記』では、小青は一貫して許仙と離れるべきだと主張し、もう恋に迷ってはならないと諭す。その理由は白素貞の気持ちを思いやってのものとは読めず、小青は白素貞の味方の立場にはない。小青の立場は元々白素貞と対立するものではないから、その位置づけが中途半端である。

『白蛇伝』1の、法海を殺すべきだという進言は、封建的圧迫を排除しようという戯曲改革の方針と通じており、それに合わせたものと考えられる。法海を殺すべき理由や、身を引くべき理由も、全て法海にある。しかし白素貞は、このように発言する小青を、粗暴であると指摘している。小青の野蛮さは、戯曲改革が排除しようとする野蛮で恐怖的なイメージと重なるから、方針に反する点でもある。ここでの小青は、粗暴ではあるが白素貞の味方である。

『白蛇伝』2では、法海を殺そうという発言はなくなった。そして、身を引くべき理由は、法海ではなく許仙の人間性に変わった。それはなぜか。態度が一変し、義理も人情もなく冷たい人になってしまった許仙の様子を描くことで、そこに展開される関係がより人間味溢れたものになる。許仙の態度がよそよそしくなり、白素貞について迷ったり恐怖を感じたりするのは当然のことだ。法海に言われたことが現実となってしまい、自分は死にそうな目に遭わされているのだから、いくら愛妻に生き返らせてもらったからといって、以前と同様な態度でいられるわけはない。この場面は、「酒変」に続き、白素貞と許仙のより豊かな感情描写に成功していると言える。

また、『白蛇伝』1では、単に身を引くべきとだけ進言していた小青は、『白蛇伝』2では、身を引けないなら許仙の疑心を除く方法を考えるべきだ、と白素貞に更なる助言をしている。ここでの小青は、白素貞のためを思った、思いやりある味方である。その助言を受けて、白素貞自らが作戦を提案し実行していることからは、前二脚本に比べ白素貞の積極性、自主性が見て取れる。これは、「酒変」の最後で、小青のきっかけにより白素貞自らが霊芝を取りに行くのを提案した部分とあわせて、彼女の夫への愛情の強さをうまく引き出しており、白素貞の性格を引き立てる効果を上げている。

『白蛇伝』2の内容は、小青の野蛮な発言を削除した他は、戯曲改革の方針を何ら考慮していないようにも思われる。しかし大きな効果として、『白蛇伝』2のような人物描写は、前二脚本に比べ明らかに物語展開に美しさを添えていると言えるのだ。

『金鉢記』では処理が不十分だった小青の性格は、『白蛇伝』1では白素貞の味方として整えられ、またそれは戯曲改革の方針にも合うものだった。『白蛇伝』2では、小青の発言や物語展開に手が加えられ、美しい筋立てが完成した。

(四) 合鉢、倒塔

場面は、白素貞、許仙、小青が断橋で再会し出産した後、法海が金鉢を持って現れるところから始まる。[25]

『金鉢記』第二十五場「別子」、第二十六場「倒塔」

白素貞が髪を梳かしているところ、許仙は鉢を手にしたまま涙を流して動揺する。[26] そこへ法海が来て、自ら手を下すことの出来ない許仙から鉢を奪い、白素貞を鎮めにかかる。白素貞は許仙との今までの出来事、子供との別れの悲しみをうたう。許仙は法海に恩を乞い、鉢を壊そうとし、さらには一緒に死のうとして、妻が鎮められそうになっている鉢に入ろうとするが、白素貞は、子供がいるのだから死んではならない、と許仙を鉢から押し出す。子供が泣き叫ぶ中、ついに白素貞は鎮められる。法海は許仙に、子供は姉の夫に任せ、私について金山に出家せよ、と言う。

法海に敗れ山に戻っていた小青が、数百年後、修行を積んで銭塘へ戻ってきた。小青は雷峯塔の塔神と大いに戦い、勝利して塔を倒すと白素貞が塔から解放され、劇は終わる。

『白蛇伝』1第二十二場「合鉢」、第二十四場「倒塔」

産後の白素貞を許仙がいたわり、幸せな夫婦の元に、法海と韋陀が現れる。(※) 許仙と白素貞の悪縁はもう尽きた、鉢で白素貞を鎮め、金山へ戻れ、と言う法海。韋陀が白素貞を鎮めにかかる。白素貞は、金鉢からの光線を受けて動け

ない。白素貞はこれまでの許仙との出来事、子供との別れの悲しみをうたう。許仙は法海に恩を乞い、「鉢を壊してしまいたい！」と嘆くが、韋陀の手により白素貞は鎮められる。（※※）

数年後、敗走していた小青が水族を率いてやって来た。小青が水族と共に塔神と戦って勝利し塔を倒すと、白素貞が塔から解放される。そこへ息子の士林が駆け寄り、母子は抱き合い、劇は終わる。

『白蛇伝』2第十五場「合鉢」、第十六場「倒塔」

陳許氏と小青が子供を囲み、産後の白素貞を許仙がいたわり、幸せな夫婦の元へ、法海が突然現れる。ここからしばらくは、『白蛇伝』1の（※）以降（※※）までと同じである。

数百年後、敗走していた小青が、修行を経て仙人らを連れ再び銭塘へやってきた。塔神と戦い勝利して塔を焼くと、塔が倒れて白素貞が塔から解放される。ここで劇は終わる。

＊　＊　＊

まず、白素貞が鎮められる場面について考える。

『白蛇伝』1、2はほとんど変わらない。注目すべきなのは、『金鉢記』と『白蛇伝』1、2の差異である。

『金鉢記』では、法海は許仙の手で白素貞を鎮めさせようとする。許仙は思い悩み、「何とか期限を延ばしてほしい」と法海に嘆願しているが、その言い方はいずれ手を下す可能性を排除してはおらず、許仙は完全に法海に逆らう立場にはない。しかし、妻への思いも断ち切れずにいて、最後には一緒に鉢に入ろうとする。このように許仙が動揺するのはもっともではあるが、その立場や性格に一貫性を保つ描き方ではない。『白蛇伝』1、2では、許仙は白素貞を鎮めるのには一切関わらないから、完全に法海とは対立する立場にあり、「許仙、白素貞と法海」の対立の構図が一層明確で

ある。法海は二人の幸せを壊す邪魔な存在であることが、観客にとっても分かりやすい。

次に、白素貞が鎮められた後の許仙についてと、結末の再会部分についてを考える。

三脚本とも、法海は白素貞を鎮める際、許仙に金山へ戻り出家せよと言うが、いずれの脚本にも、その後許仙が出家したかどうかの明記はない。『金鉢記』では、白素貞が鎮められた後、法海が許仙に、子供は姉の夫に渡して金山に出家せよと言い、許仙が大泣きする子供を高く掲げるところで「別子」の場面が終わっている。これだけでは出家したかどうかは分からないが、後で触れるように『金鉢記』は『義妖伝』が参考にされたことを考えると、出家したと考えられなくはない。『白蛇伝』1では、数年後であるのに再会を果たすのは母子のみであるから、許仙は出家したと考えて間違いないであろう。『白蛇伝』2では、前後関係のみでは出家したかどうかは不明である。

『白蛇伝』1の数年後の再会という筋立ては、数百年後に白素貞が解放されるというよりも現実味があるし、母子の再会という設定も、観客には身近に感じられやすい。[27] しかし、肝心の許仙との再会がないのは、観ている側としては腑に落ちない部分がある。許仙との再会がなければ、上述のように許仙の出家がますます確信的になってしまう。『金鉢記』から時間の設定を大きく変えているのだから、許仙とも再会させるやり方もあったはずで、不十分な改作の処理と言わざるを得ない。『白蛇伝』2は『金鉢記』と同じ設定に戻っている。田漢はこの設定の方が良いと判断したのだ。再会しないことで、劇には最後まで神話的な雰囲気が保たれる。一つの物語として、美しく幕を下ろす効果をもたらしている。

法海が白素貞を鎮めようとする場面は、『金鉢記』では許仙の人物処理が不十分であったのが、『白蛇伝』1、2ではうまく整えられ、「許仙、白素貞と法海」という対立の構図がより明確になった。許仙が出家したか否かは、書かれていない以上はっきりしたことは言えないが、私は以下のように考える。もし出家したと明示すれば、大団円を望む観客の心理に逆らうものになってしまう。許仙が出家してしまっては、いくら最後に白素貞が塔から解放されるとは言え、

観客は完全には満足しないであろう。もし出家しなかったと明示すれば、それは白蛇故事の筋と違ったものになってしまう。田漢が参考にした『義妖伝』でも、方成培の『雷峰塔』でも、馮夢龍の「白娘子永鎮雷峯塔」でも、許仙は出家するのだ。[28] 田漢は、いずれの効果も狙いたくなかったので、許仙の出家については明言をさけたのではないだろうか。そして最終的に『白蛇伝』2では“数百年後、再会なし”に固め、神話的な雰囲気を持たせることに成功したのである。

（五）子供の存在

白素貞と許仙の間に生まれる子供の描き方は三脚本で異なっている。

『金鉢記』第二十一場「産子」、第二十三場「仙驚」、第二十五場「別子」

「産子」の場面では、陳許氏宅での出産の慌しい様子が細かく描かれている。「仙驚」では、陳彪が子供の顔を「天庭飽満（額が広くてくぼみがなく、あごが四角で丸みがある富貴の相）」と言って誉めそやす。士林という名前も、「将来士大夫の林に入るだろう。」と気に入っている様子である。「別子」では、外に多くの客が子供の誕生を祝いに来ている。法海が白素貞を鎮めにやってきて、白素貞は子供との別れの悲しみの心情を激しく吐露する。

『白蛇伝』1第二十一場「敗青」から第二十四場「倒塔」

「敗青」の場面では、小青が赤ん坊を抱き陳許氏と共に面倒を見ている。「合鉢」では、法海が白素貞を鎮めにやってきて、白素貞は子供との別れの悲しみを激しく吐露する。「哭塔」は、成長した子供の士林が独唱する場面である。母親が法海によって雷峰塔に鎮められたことを知ってしまった士林が、母親白素貞を救いたい気持ちをうたう。[29]「倒塔」の場面では、前述のように、数年後、小青がやって来て塔を倒して白素貞を救い出し、母子が再会する。

『白蛇伝』2第十五場「合鉢」

子供は「合鉢」にのみ登場する。冒頭では、陳許氏と小青が子供を囲んでいる。陳許氏は、今日で満一ヶ月を迎えた

子供のために、服などの身の回りの品を作って持ってきて、小青が喜んでいる。白素貞も、既に子供のためにたくさん服を拵えている。子供の名前は夢蛟である。[30] 白素貞が法海に鎮められる場面では、白素貞は子供と別れなければならない悲しみを激しく吐露している。

＊　＊　＊

子供が中心的になる場面は次第に減少している。『金鉢記』は、子供の誕生とそれに伴う出来事の描写が三脚本中最も詳しい。『白蛇伝』1ではこれらの内容は消えたが、「哭塔」の場面が加えられ、次に続く再会の場面へ物語を繋いでいる。『白蛇伝』2では、子供が中心的に展開される場面は「合鉢」の冒頭部分のみである。こうして見ると、一見したところ次第に子供の存在感が薄くなり軽視されていく傾向があるようにも感じられるが、こうした変遷は何を意味するのだろうか。

『金鉢記』の「産子」と「仙驚」の場面は、ともに白蛇故事を演じるのにそれほど必要な部分ではなく削っても問題はないため、『白蛇伝』1以降は削除されたものと考えられる。勿論、これらの場面は完全に無意味なわけではなく、物語を脚色する大事な要素でもあるが、こうした場面が多くては劇が煩雑になってしまうであろう。『白蛇伝』1では「哭塔」が作られたが、「倒塔」で母子が再会する筋立てになっているから、その伏線としてこの場面が用意されたと言えよう。『白蛇伝』2では、こうした場面は全てなくなっている。

子供が登場する場面で詳しく描かれているのは、白素貞の、子供に対する愛情である。

『金鉢記』では「別子」の場面で、子供との別れの悲しみを激しく吐露する。『白蛇伝』1、2も「合鉢」の場面において同様で、白素貞が子供に注ぐ愛情に変わりはない。たった一ヶ月で離れなければならない我が子を、育ててもらう

べく陳許氏へ託す。母から子への愛情に変化はなく、決して白素貞にとって子供の存在が薄れているということはない。また、小青や陳許氏といった他の女性登場人物にも注目してみると、やはり彼女たちは白素貞の子供をとても愛していることが分かる。[31] 三脚本を通して、彼女たちは子供の世話をしているし、『白蛇伝』2では、陳許氏は子供に服まで拵えて持ってくるのである。このように、子供の存在感は、白素貞をはじめとした子供の周囲の人物がかける愛情によって裏付けられている。子供の存在が薄れているわけではないのである。

子供は許仙と白素貞にとって非常に大きな存在である。様々な困難を乗り越えて授かった愛の結晶だ。それだけに、子供が劇中で果たす役割は小さなものではないだろう。

子供を描いた場面は確かに減ったが、それは子供を軽視する傾向を示してはいない。物語にとって必要な部分と不必要な部分を取捨選択し、必要な部分（子供の存在、肉親らによる愛情表現）は保ち、増幅させる、という改作の仕方だったのではないだろうか。

第三章　改作の意味

ここで最後に三脚本の改作の意味についてまとめてみたい。

『金鉢記』は、本来は宋代の話であるはずの白蛇故事に倭寇が登場するといったような不自然な時代設定に見られるように、抗戦戯劇の性格が非常に色濃い作品である。この性格は後の二脚本にはなく、『金鉢記』にのみ見られる性格である。

『金鉢記』では、人物性格の処理に不十分な点が見られた。白素貞は、「盗庫」の場面から漂う妖怪的な不思議さ、非人間的で恐怖的な印象が強い。許仙は、そのような妻を愛しつつも恐れを抱き、法海の言動を否定しきれず動揺してしまい、その愛情を保てずにいる場面がある。小青は、結婚を取り仕切ったり、法海を相手に戦ったり、最後に白素貞を

解放したりして、白素貞の良き従者として存在するが、「煎薬」での進言内容からは、こうした要素に反する部分も見られる。このように人物の性格に一貫性が保たれていないことは、この物語の核心部分となる白素貞と許仙の愛情に深みが感じられない結果を導いている。また総じて、登場人物の唱や台詞に見える感情表現が豊かとは言えないことも合わせると、『金鉢記』は脚本としてはまだまだ未熟なものであったと言えるであろう。

『白蛇伝』1は、戯曲改革の真っ只中に書かれた脚本である。その傾向は顕著に見られるが、戯曲改革の方針が徹底されたものとして完成するのは『白蛇伝』2になってからのことで、『白蛇伝』1は中途段階にある作品である。戯曲を改造して中国共産党の宣伝道具とし、人民の新たな生活を表現する新たな戯曲を打ち立てる、という戯曲改革の目的は、婚姻法の宣伝という任務を『白蛇伝』1に負わせた。そして『白蛇伝』1はその機能を十分に果たした。許仙と白素貞が互いを一途に愛し、自由な恋愛と結婚を追求する姿、そして、それを妨害する法海に対抗する姿は、まさに、古い封建的圧迫に対抗する新たな力である。また、これは『金鉢記』から変わらない点であるが、白素貞と許仙の力関係に男尊女卑の傾向は全くなく、男女対等を掲げる婚姻法の原則と合っているし、婚姻法の宣伝にはうってつけの題材であったと言えよう。

こうした目的を果たしてはいるが、物語の処理に甘い点が何点か見られる。例えば、第十八場「逃山」で、許仙は自力で金山を逃れ敗走した白素貞のもとまで行くが、数年後に再会するのは母子のみであり、前章で述べた通り改作の仕方としてはいささか不十分である。[32] また、「盗庫」を残したことは、神話的要素を残すという良い効果もあったが、白素貞の性格を見るに不十分な処理であった。「煎薬」では、小青の立場は白素貞の味方として整えられたが、なぜか粗暴な性格になっている。

しかし全体的に『金鉢記』と比べて、人物の感情表現が非常に豊かになっている点は、大きな進歩であり評価すべき点である。

『白蛇伝』2は、『白蛇伝』1で既に満たした条件はほぼそのままに、脚本としてさらに洗練されている。まず、場面構成が単純化したことにより、見せ場が際立った、まとまりある演目に完成した。また、感情表現は前脚本からさらに豊かになった。そして前章で検討したように、『白蛇伝』2では人物の性格に一貫性が生まれた。例えば、白素貞の許仙への愛情は、自主性や積極性が加わることで深さが増した。許仙の白素貞への愛情には、人間的な感情からくる迷いや動揺は若干見られるものの、前二脚本に比べて、明らかに一途さの度合いは増している。小青は、主人のためを思って仕える、白素貞と許仙の恋愛の良い引き立て役になっている。

また、戯曲改革の目的は『白蛇伝』2で大いに果たされた。田漢は『白蛇伝』2の序でこう述べている。「白蛇伝は中国の民間に長く伝わる神話故事である。これは、最初は若干恐怖的な色彩を帯びていたが、次第に美しく変化し、故事の主人公白素貞は、更に愛すべき、人々の同情に値する人物へと変化した。人々の同情に値する所以とは、彼女があんなにも熱烈に純粋に許仙を愛していることにある。……法海に哀願するが応じてもらえなかった後、妊娠中の身を顧みず断固としてこの封建的圧迫の代表者に対し命がけで戦った。」恐怖的なイメージを取り去り、封建的要素を排除し、それによって人民の新たな姿を描く新たな戯曲を作り上げる、という目的は、田漢の『金鉢記』から『白蛇伝』1、2への発展において達成されたのである。

「水闘」以降の山場から結末までを見ると、再会部分を除いては三脚本に大きな違いはない。白蛇故事という本質、白素貞の自由な恋愛の追求と法海による圧迫、という脚本を貫くテーマそのものに変化はない。抗日戦争や戯曲改革といった各々の背景が、三脚本に個性を与えたのである。そうした背景に応じて物語展開に手が加えられ、脚本は変化を遂げた。脚本が次第に洗練された結果、大本にあるテーマの美しさにも磨きがかかった。

『金鉢記』、『白蛇伝』1、『白蛇伝』2にわたる改作の背景には、戯曲改革という大きな国家政策があった。しかしこの改作は、その目的を果たすにとどまらず、演劇作品としての完成度が高められてゆく過程でもあった。そこには、一

人の劇作家が、同じテーマを扱った脚本を二度にわたり改作し成長させてきた過程を見ることができるのである。だからこそ、現在でも上演されるのは『白蛇伝』2なのだ。

注

(1) 白蛇伝について、清代までの作品の研究には、潘江東『白蛇故事研究』(台湾学生書局、一九八一)他がある。

(2) 本節の内容は主に以下の資料に基づき整理した。張向華編『田漢年譜』(中国戯劇出版社、一九九二)、董健『田漢伝』(北京十月文芸出版社、一九九六)、劉平『戯劇魂—田漢評伝』(中央文献出版社、一九九八)、北京市芸術研究所、上海芸術研究所『中国京劇史』(中国戯劇出版社、一九九九)、田漢「《白蛇伝》序」(『田漢戯曲選 下』所収、一九五五)、似群「田漢与《白蛇伝》」(『戯劇電影報』、一九八四年四月一日)、李紫貴「田老写《白蛇伝》的始末」(『中国戯劇』、一九九八)。

(3) 四維平劇社は一九三七年に桂林にできた劇社。田漢はその演劇指導をした。『金鉢記』のテキストは一九五〇年一〇月に中華書局より出版。本論では東京大学東洋文化研究所蔵の第二版(一九五一)参照。

(4) 全名『綉像義妖伝』。清の弾詞。嘉慶一四(一八〇九)年陳遇乾作、陳士奇、兪秀山評定。同治八(一八六九)年刊本もある。語り物の白蛇伝物語。『義妖伝』については以下参照。山口建治、氷上正「弾詞『義妖伝』校注試稿(一)」(『人文研究』一〇六号、一九九〇)、同「弾詞『義妖伝』校注試稿(二)」(『人文研究』一一〇号、一九九一)。

(5) 『琵琶行』は一九四六年、『武則天』は一九四七年。いずれも田漢による京劇脚本。

(6) 白素貞の下山の目的が報恩であるため(注23参照)、白素貞が封建勢力に立ち向かい自由な恋愛を追求するという白蛇故事の主題が見えてこない。反封建対封建の構図が見えないため、法海が白素貞を迫害する理由を半ば無理矢理導くため不自然な時代背景になってしまっている、という批判。

(7) 『劇本』一九五三年八月号(中国戯劇出版社)に発表。本論では東京大学文学部蔵の原本参照。

(8) 田漢は評賞委員会の副主任委員の一人であり、自らに編劇賞は不要であると提起していたため、田漢への賞はない。(劉秀栄「田老、我們想念您!」『中国戯劇』一九九八)

(9) この『白蛇伝』は一九五五年六月作家出版社より出版(本論では、東京大学東洋文化研究所所蔵本を用いた)。第一場「遊

湖」にて、白素貞は小青への台詞で「峨眉で修練をしていた時には、洞窟は寒く、毎日白雲に深く閉ざされ、暇な時はモミの木の道に遊び、桫の花に心がふさいだ」と回想している。この描写は、実際に峨眉山に登ったことによって得られたものだった。（『白蛇伝』序）

（10）張艾丁「懐念田漢同志」（『光明日報』一九七九年四月二九日号）。

（11）戯曲改革と言う場合、通常建国後の動きを指し、『金鉢記』の時期はこれには当らないが、三脚本の背景を通観するため一括して本節で扱っている。本節の内容は、主に以下の資料に基づき整理した。趙聰『中国大陸的戯曲改革　一九四二―一九六七』（香港中文大学出版、一九六九）、『中国京劇史』、中国大百科全書出版社編集部『中国大百科全書』（中国大百科全書出版社、法学一九八四、戯劇一九八九、中国文学一九九八六、戯曲・曲芸一九八三）。

（12）倭寇の侵入、銭塘知県の汚職などを描くことにより、国民党の反動統治下の悪の現実をほのめかした。前者については、『金鉢記』第四場「結褵」で、許仙は「倭寇に侵略され……父母は二人とも亡くなった」と家族構成を紹介する。後者については第二章第二節（一）参照。

（13）「有利」：封建的圧迫、貪官汚吏に反対し、統治階級内部の矛盾を暴露し、民族の気概、婚姻の自由、義侠心などを讃える内容。「無害」：民衆に多くの益はないが害もないもの。歴史知識や歴史教訓を得られる内容。「有害」：封建的な圧迫、奴隷道徳、失節し投降すること、迷信、愚昧、色情などの内容。

（14）戯曲改進委員会は、戯曲改進局による修正・編劇脚本を審査し、戯曲改革に関し文化部に建議を行う。戯曲改進局よりも権限が強い。田漢も会員の一人。

（15）このことは、『中国大陸的戯曲改革　一九四二―一九六七』に指摘されている。この婚姻法は、一九八一年一月一日に社会の変化に合わせた新たな中華人民共和国婚姻法が施行されると同時に廃止された。

（16）封建主義的な婚姻制度とは、事実上の売買婚、多妻は認めないが妾は認める事実上の一夫多妻制など、夫婦不平等で男尊女卑的な事柄を指す。

（17）『秦香蓮』は、宋代の物語。秦香蓮は三年も連絡の無い夫陳士美を尋ね子供とともに入京するが、皇女の夫となっている陳士美は妻子に会うのを拒否し宮廷から追い払ったばかりか、韓琪に殺すよう命じる。真相を知った韓琪は、彼女らを逃して自害。秦香蓮は包丞に訴え出る。包丞はあらゆる言い逃れをする陳士美を死刑に処した。『梁山伯与祝英台』は、梁山伯と祝英台は共

に勉学に励んだ仲であるが、三年が過ぎ別れの時、梁は祝が女性であったことを初めて知った。二人は将来を誓うが祝は他人の妻となってしまい、梁は悩み恋に焦がれて死んでしまう。祝が梁の墓前に泣き伏すところで墓が割れ、二人はあの世で夫婦となるという物語。

(18) 例えば削除された『金鉢記』にのみある「渡語」は、法海が許仙に出家を勧めに行く道中の船での法海と船頭とのやりとりの場面。『金鉢記』『白蛇伝』1にある「海迫」は、出産した白素貞の元へ、法海が金鉢を持って向かおうとするだけの場面。いずれも非常に短い。

(19) 物語の冒頭、許仙と白素貞は西湖で出会う。主従関係にある白素貞と小青は、峨眉山から人間界へ降りてきた蛇の精。その時白素貞に貸した傘を返してもらうために許仙は白素貞の家へ向かう。そこで、小青の仲立ちにより、二人は結婚をする。

(20) 注6の戴不凡による批判を参照。

(21) 『金鉢記』第四場「結褵」：郎君没有錢用，你該借點錢來吓。
『白蛇伝』一第四場「結親」：官人孤苦，無錢使用，你該借些錢來呀。

(22) 「思えば彼女には少し変なところがある。錢塘県の銀を贈られた時のこと、彼女のようなか弱い女性が、どうして銀を盗み出せるのか。まさか法海の話は本当なのだろうか。」

(23) 『金鉢記』では、白素貞は、幼い時に人に捕らえられていたところを許仙に助けてもらったことがあり、その恩返しのために峨眉山を下り許仙の元へやってきた。(なお、白素貞は既に数千百年修行をしているから、許仙は以前助けてくれた人の生まれ変わりであろう。)『白蛇伝』1，2には報恩の意図はない。

(24) 『金鉢記』第十三場「盗草」で、白素貞は、仙山を守る鶴童、鹿童に一旦敗れるが、南極仙翁の慈悲に助けられる。南極仙翁は「この霊芝を持ち帰って夫の命を救いなさい。ただし子供を生んだ後は速やかに峨眉に戻り、大道を修めなさい。もしまた恋愛に溺れるようなことがあれば、必ず抜け出せなくなり、悔いても遅くなってしまうぞ。」と忠告する。『白蛇伝』1，2では、霊芝を持ち帰り夫の命を救うように言うだけである。

(25) 『金鉢記』「聽潮」、『白蛇伝』1、2「上山」で、許仙は法海について金山へ行ってしまう。白素貞と小青は許仙を取り戻すため金山で法海と戦うが敗れる(「水鬪」)。その後、「断橋」での許仙との再会後、白素貞は産気づき陳許氏の元へ身を寄せ出産する。子供が満一ヶ月になる頃、法海がやって来る。

(26) 『金鉢記』第二十四場「接鉢」では、金鉢を持って現れた法海が「白素貞が髪を梳かしている隙に、これを彼女に圧し付けなさい。」と許仙に言い、金鉢を渡して去ってゆく。

(27) 『白蛇伝』1の数年後の再会という筋立ては、『義妖伝』の筋立てと若干似ている。

(28) 『雷峰塔』は、清代の戯曲作家方成培一七七一年の作。以後の白蛇故事を扱った映画や劇などは概ね方成培本を下敷きにしている。「白娘子永鎮雷峯塔」は、馮夢龍『警世通言』(一六二四)第二十八巻。白蛇が雷峰塔の下に閉じ込められる話としては現存最古のもの。

(29) 数年後小青が塔を倒すパターンでも、許仙と白素貞が再会する話(上海京劇『白蛇伝』二〇〇二年日本公演　上海京劇院)や、許仙と子供と白素貞が再会する話(VCD『京劇白蛇伝』中国唱片上海公司)などもある。

(30) 『綉像義妖伝』でも子供の名前は夢蛟である。この話では、白素貞が鎮められた後、許仙は出家する。成長して状元となった夢蛟が雷峰塔へ行って母を祭ると白素貞は自由になり、母子が再会する。

(31) 男性登場人物と子供の関わりはあまり描かれていない。許仙については、子供よりも妻への愛情が全面的に描かれている。陳彪は、『金鉢記』では子供と関わりがあるが、『白蛇伝』1では「盗庫」にしか登場せず、『白蛇伝』2ではそもそも登場人物として存在しない。

(32) 『金鉢記』と『白蛇伝』2では、許仙は金山から逃げ出そうとするところを法海に見つかるが、法海は風神を呼び出して、許仙を白素貞のもとまで送らせる。